

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

| | |
|---------|-------------------|
| 誌名 | やぶなべ会報 |
| 号/発行年/頁 | 17 / 2005 / 21-28 |
| タイトル | 少年時代の自然環境(1) |
| 著者名 | 五十嵐正俊 |

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

少年時代の自然環境 (1)

第3代 五十嵐 正俊

はじめに

タイトルを「少年時代の自然環境」としてみましたが 60 年以上前の少年時代の記憶を辿って当時遊び相手になって貰った身の回りの生き物達のことを記憶だけで書き出すのですからかなり無理があるかもしれません。また、時代が青森市空襲被害以前の幼児期から少年期(1944 年まで)の間で年代が前後しているのもお許し願います。

物心が付いて兄達と出歩く頃には魚採り(フナやドジョウ、ナマズなど)だったり、鳴く虫の虫捕りでした。少年時代の記憶と言えば兄達のお供で水辺や草原で遊んだ記憶が多く、玩具や絵本の記憶はあまり残っていません。長兄は魚採り、次兄は鳴く虫とトンボのヤゴを採るのが得意でした、したがって、生物班に入るまでは兄達の影響が非常に大きかったように思います。生き物達の名前など勝手に子供ら同士で付けていたものを後年図鑑などを見るようになってから記憶に残っている特長からあの当時の「クロギス」は「ヒメギス」、「アオギス」は「ヤブキリ」という種類だったのか、といった具合で標本もノートもない無責任な物語りに過ぎないことをお断りしておきます。

北金沢町

北金沢町は私の出生地で番地は 181 番地(現在は古川 3 丁目)でした。家の後ろは鉄道(現在の JR)の敷地で、焼いた古い枕木で柵が造られたのは兄達の後を付いてチョロチョロ歩き回る様になった頃だったと微かな記憶(古い枕木を持ってきて現場で表面を焼いていた)が残っています。

当時我が家には「ウサギ」を飼っていた小屋があつて、その小屋から外へ出ますと東北本線が走っている線路の土手があり、その土手の下で父が草刈り鎌を使って竹で編んだ四角

の籠に「クローバ」(シロツメクサ)を刈り採るのが幼年時代の微かな記憶の始まりです。

また、この土手下には「ゲンノショウコ」「ドクダミ」などの薬草が豊富に生えていたらしく、ウサギ小屋の天井には乾燥のために吊るされていた束がぶら下がっていました。

我が家のあつた小路は東に行くと旭町通り、西に行くと浪館通りへと繋がり、東北本線は急カーブで青森駅構内へ入っていくので土手下で列車の通過するのを見ていると倒れて来る



ウスイロササキリ♂

のではないかと恐怖感を抱いたものでした。

その後、この線路の土手には大量の炭カラ(機関車から排出された石炭の燃え残り)が投棄されて不毛の地に変貌しました。しかし、やがて「アカザ」「オナモミ」などが生える荒地の状態になって、「カンタン」「ほそぎす=ウスイロササキリ」「クルマバッタモドキ？」などが現れました。

小学校高学年になった頃は中学に進んでいた兄の影響で「こおろぎ」や「ぎす」などにも関心が移っていて「みつかどコオロギ=タンボオカメコオ



カンタン

ロギ」「エンマコオロギ」「ツヅレサセコオロギ」「カワラスズ」など「こおろぎ採り」にも夢中になっていました。「ツヅレサセコオロギ」「カワラスズ」は線路の碎石の間で鳴いている事が多く、時には東北本線の石を掘って捕獲する事もあったのです。とくに「カワラスズ」は 100%線路の石の間で鳴いていました。「コオロギ類」には♀を呼ぶ囀り鳴きと交尾前の「恋の囁き鳴き」があってそれらを聞き分けながらの採集でした。

我々兄弟の虫捕りは全て素手の手掴みでした。「タンボオカメコオロギ」などはジーツと耳を傾け、最後の小石 1 個まで鳴いている場所を特定して懐中電灯で照らしながらその石をソーツと持ち上げると、まだ翅を立てて鳴いていたままのオスと向き合っ触覚が触れているメスが現れたりするのでした。その上に虫を潰さないようにお椀のように丸めた手のひらを被せるのでした。ですから、虫捕りは好きでもネットなどは使いませんでした。後年、古い蚊帳と父手製の針金の枠で作った昆虫網を作ってもらいましたが、重くて使いづらかったようです。ですからチョウなど飛ぶ虫には手を出さなかったのです。

1944 年頃、聞きなれない「コオロギ」が鳴いていることを兄が気付き、捕獲を試みた事がありました。後にこれは「エゾエンマコオロギ」であることが判りました。この種は頭部の眉斑の大きさで「エンマコオロギ」と識別できるのですが、鳴き声が「リ——、リ——」と聞こえ、「エンマコオロギ」の高らかに転がすような「囀り鳴き」とは明らかに異なっていました。コオロギ採りは少し行動半径も広がり、北片岡に住んでいた叔父の家近くで畑の縁に石や枯れ草を積み上げた一角があって、たくさんのコオロギ類が鳴いている場所にも行ったことがありました(多分、鈴木二好氏の生家付近だったと思います)。



ツヅレサセコオロギ

炭カラの砂漠も、ニワトリを飼っていた我が家ではこの炭カラの砂漠に鶏糞を施し「ジャガイモ」などを植えていた様です。水は後述の水路から長柄のヒシヤクで充分に散水出来たの

でした(無断栽培?1945年7月28日の戦災の直後にはこのジャガイモを掘って同じく焼
け出され一晩逃げ回ってお腹の空いた近所の方々と焼けた鍋で煮て食べたそうです)。



エンマコオロギ

線路は東北本線その他、複数あって貨物列車の操車場、客車庫、機関庫などにも繋がっていたので高速で通過する本線を除けば低速で走る機関車、入れ替え作業の列車などが頻繁に行き来していたのです。

さらにその南側には貨物専用の線路があって、子供の頃は一本線路とよんでいました(現在も残っています)。これは奥羽本線方向から来る貨物専用線として使用されていて青森駅を經由せずに直接東北本線と奥羽本線に繋

がっていた様です。その南に沿って東の方向から来る水路を隔ててあまり大きくない(樹齢15年生前後:推定)スギ防雪林がありました。

防雪林の中には沼地(鉄分が多かったためか赤く濁って、子供心にも綺麗な沼ではなかった)があって、イモリやコオイムシがたくさん棲んでいて網で掬ってもフナなどが採れた記憶はありません。鉄道防雪林で記憶に残っているのは顔の青白い「アカトンボ」(=マイコアカネ:マイコは舞妓の意味らしい)で、オスの腹部は真っ赤で小型ながら可憐なトンボ(マイコアカネは現在、青森平野では絶滅)がごく普通に林縁の草むらを飛び交っていました。このほか、スギ林の草むらには「いなご=コバネイナゴ」や「オンブバッタ」のほか、「ぎーぎーギス=ヒメクサキリ」「セズジツユムシ」が棲息していました。この林では秋の訪れと共に西日を浴びているスギの枝にねぐらに利用するためらしく小型のヤンマが止まるのでした。ソーツと手を伸ばすと素手でも簡単に捕らえることが出来ました。当時は名前など全く判らず、ただの「ヤマトンボ」でしたが、腹部が♂はブルーで、♀はグリーンと体の色彩が異なっていました。後年、記憶に残っていた特長から「マダラヤンマ」であることが判りました。

同じ頃、林縁には刈り取った草などを捨てていた場所があって、チョツと変わった虫が棲ん



ヒメクサキリ

でいました。2cm 足らずの小さな虫ですが非常に細長く、その胴体にはさらに細い脚が付いてふわふわとゆっくり歩き回っている虫「ふわふわ虫」でした。たぶん、「イトカメムシ科」の個体ですが、生息場所などから判断すれば「オオイトカメムシ」かもしれません。

また、一本線路と青森駅への入れ替え作業用の複数の線路の間には三角地帯の空き地があって数坪の小さな沼があり細い水路で小

川と繋がっていました。

三角地帯のこの小沼は増水時には水に浸かるので激流から逃れた「フナ」や「ナマズ」の棲みかとなり、子供らの「掻い掘り」の対象になっていました。頃合を見て、近所の悪童らと組んでスコップとバケツをもって列車の通過する合間をぬっての出漁でした。泥だらけになって水を掻き出しても、せいぜい 10 匹程度の「フナ」や「ナマズ」「ドジョウ」「ぬまえび＝ヌカエビ」などが採れるだけでした。いっしょに採れる「コオイムシ」は嫌らしいので手にしませんでしたが、「ミズカマキリ」は連れて帰って飛び立つのを眺めたものでした。沼には「オモダカ」らしい葉っぱの先が尖った植物もあったようです。



オムバッタ

この小さなデルタ地帯の対岸は次第に広くなって畑になっていたようです。

水から上げられた「ミズカマキリ」は体が乾いてくると、首(前胸背)をパクンと折り曲げて次の瞬間翅を広げて飛び去るのでした。

また、この付近には川岸が浅い泥になっていた場所があって、7月頃になりますと羽化が近くなった「シオカラトンボ」のヤゴが翌日の羽化に備えて岸に寄って来るのでした。水際の泥をそっと撫でると泥に隠れて見えないヤゴが尻尾をキュッと上げるので、それを拾うようにしてヤゴ採りをやるのです。トンボの羽化のシーズン中毎日のようにヤゴ採りをやっていた様でした。翌日、学校へ行く前ぎりぎりの時間までこの「シオカラトンボ」の羽化の様子を眺めるのに夢中になっていました。

線路は我が家の裏辺りで水路に架かった数mの鉄橋を渡っていました(万太郎堰の分流?)。この鉄橋の下流には洗い場があって洗濯や、時には障子の張替えのためこびり付いた糊を落とすため流れの中に障子の骨を漬けこんでいる人もあった様で川の水は近所の住民にいろいろと利用されていました。



直立型休止期
(イトトンボ類、サナエトンボ類共通)

微かな記憶ではこの洗い場で「ミズスマシ」を掬おうと兄と金網の網ジャクシの取り合いになり、川に落ちた様でした。当時はまだ綿入れの和服を着ていたのでそのまま数m流されていった様なおぼろげな記憶が残っています。

この小川は上流部で北金沢町住宅地を横切り、青森平野の水田地帯へと遡るのでした(入内川水系の一部?)。下流方向はスギの防雪林を横切り、一本線路の他 3 本の線路の下を潜って(数 m の鉄橋)さらに古川小学校(我が家から約 150m)の東を通って安方付近で青森湾に流入する様でした。

この小川では 1 度だけ「イシガメ」を捕獲した事があったのですが自然個体なのか飼われ

ていた個体が逃げ出したものか定かではありません。飼育個体には逃げ出さないように甲羅の一部に小穴を開けて紐で縛っておく事もあったのですが、この「イシガメ」にはそんな痕跡などは無かったと記憶しています。

また、兄に連れられてかなり上流まで遡った事があり、やや清流化した田圃の用水路では「スナメグリ」と呼んでいた「シマドジョウ」と「カジカ」だと思っていた「ジュズカケハゼ」が採れました。多分、大野集落付近まで田植え前の畦道を歩いて行ったのでした。



ナマズ

川幅数 m の小川だったので雨が増水した時には四手網を仕掛けて「魚採り」をやる大人もいました。父も「魚採り」は好きだったらしく我が家にも四手網が1セットあって普段は分解して物置に吊るされていました。

獲物は「フナ」が主で「ナマズ」「ドジョウ」など、時には「コイ」も採れるらしいのですが父の網では採れなかったようでした。この小川には「ハエ」(ウグイ科の魚であるが正確な種名は

不明)と呼んでいた銀色のスマートな魚が掛かることもあり、後年釣り上げた「ウグイ」と比較してみたのですが少年時代の印象とはかなり違う様に思われました。

このほか一度だけですが、雪融けの頃、前記の洗い場の下で鱗の大きな 15cm 程のスマートな魚体を見た記憶があります。たった一度だけの幼年期の記憶ではありますが背面から見て網目模様に見えた胴体の印象が鮮明に残っていて「チカ？」ではなかったかと思っています。

雪融けのシーズンには午後になれば増水と濁りで生き物の姿などは見えないのですが、朝は夜間の冷え込みによって雪融けが止まるので水量も減って上流から流されてきた「ナマズ」や「モクズガニ」が岸よりの浅場で休息しているのです。大きな「ナマズ」や「モクズガニ」が少年の手で簡単に手掴み出来るのが雪融け期の楽しみでした。手掴みのコツは人差し指と中指を「ナマズ」の左右の鰭(胸鰭には棘があり、この棘に指を掛ける)に掛けて残りの親指と薬指、小指で頭を握るのです。

「ナマズ」の体長は 30cm 程度だと思いますが少年時代の目には相当の大物であった様に記憶しています。お袋が料理して漬け焼(醤油または味噌)にして食べさせてくれたのですがこの頃の「ナマズ」は美味だったと記憶しています。



モクズガニ(稚ガニ)

「モクズガニ」も手掴みなのですが親指と人差し指で甲羅を挟む様にして捕獲しました。このカニはかなりの美味らしいのですが、何故か我が家では食べずに茹でて真っ赤になったカ

ニはニワトリの餌にされていました。「モクズガニ」は「上海ガニ」と近縁で、日本でも各地で食用(一部で養殖)として捕獲されている事を知ったのは大人になってからで誠に勿体無いことをしたものだと思っています。残念ながら未だに「モクズガニ」の味を知りません。青森では最近ほとんど捕獲出来なくなっています。

現在この小川は埋められたのか地下の下水管になっているのか不明です。最初の記憶では木の杭と板で護岸されていましたが間もなくコンクリートの護岸に替えられてしまいました。学校までの中間付近にはやや大きな「シダレヤナギ」の木があり、その対岸は馬の水浴場(家の近くに家畜商がいて道産子を仕入れて売っていたらしい)がありました。この頃までは水も比較的澄んでいて川岸の一部には「マコモ」の株があり、流れの中には「ヒルムシロ」「セキショウモ?かコウガイモ?」などがゆらゆらと揺れ、その上を「ハグロトンボ」(現在、青森平野では絶滅、青森県レッドデータブック記載種)がヒラヒラと飛び交っていました。

そして、流れの中には「ドブシジミ」でしょうか?小さな白っぽいシジミ型の二枚貝が無数に繁殖していたのでした。

この小川にコンクリート護岸が施された頃から、冬になれば褐色の綿のような「ミズカビ」が一面に生えてドブ臭が漂うようになっていました。ところが、1945年7月28日、青森市はB29爆撃機による焼夷弾攻撃を受け、市内の大部分は焼滅して家庭雑排水の流入が止まったためなのでしょう、一時的に水草が復活し、古川小学校付近まで「フナ」の群れが観察できたのでした。まさに「自然再生」のひと時であった様です。



エゾツユムシ♂

ドン山界限

旭町の踏み切りを渡ると線路沿いに東に通じる小道が遊郭の裏口(「森紅園」)や豚小屋の前を通過して機関庫方面に向っていました。その道は南側に水路(旭町踏み切り付近で防雪林前の水路に繋がる)を伴って機関庫付近で南に90度曲がって荒川刑務所から荒川村(当時)に通じていた様でした。水路の中には黄色の花が咲く「キショウブ」の生えている場所があり、かなり後までこれを「カキツバタ」だと思い込んでいました。

この道路の曲がり角(機関庫の南)の東側付近に「ドン山」と呼ばれる午砲台がありました。高さがせいぜい4~5m位の人為的に土を盛り上げたような小山で頂上には北方を向いた大砲がありました。この大砲は先込め式の古めかしいものでした。東西方向だけ簡単に板を張った様な小屋の中に納まっていた大砲は常に火薬の臭いがしていました。

ドン山の西側下には南から北に流れる川幅2m程度のやや流れの速い小川があつて水草が揺れて川面には「ハグロトンボ」が行ったり来たりしていました。小川には丸木橋のような粗末な橋が架かっていて午報係りの人が住んでいた平屋の住宅前を通過して荒川街道に

通じていました。

このドン山の北側、機関庫の東には転車台があってさらにその東は湿地帯で「ヤチハンノキ」(印象に残っている記憶から推定)が点在していた様に記憶しています。この湿地は下駄履きの子供の足ではほとんど歩き回することは出来ませんでした。



マダラスス♂
(カワラスズはこのマダラスズに良く似て体長 10mm 前後)

ただこの林縁付近の比較的乾いた草むらには「くろぎす」と呼んでいた「ヒメギス」が棲息していました。

機関庫付近で 90 度曲がった道路の南には荒川刑務所がはるか遠くに見えていました。この

の道に沿って 1 本の水路があって線路の下をカルバートンネルで潜っていて(この水路は大野方面から流れてくる小川(かなりの清流:大野集落付近では野菜などを洗うのに利用していました。集落付近でザリガニ=当時はアメリカザリガニではなくニホンザリガニを見たこともあります)が合流して水量が比較的豊富でした(川底は砂))、北片岡町付近でふたたび地上に現われ、柳町を通過して青森湾に注ぐ人為的水路だったと思います。トンネルに入る前には水門があって、水門を開くと旭町方面に広がる水田に灌漑用水を流すようになっていました。この水門付近では平べったい「べったらヤゴ」と呼んでいた「ヤゴ」が棲息していたのでした(この付近に棲息していた魚類では「ハエ=ウグイの仔魚?」が採れました)。この付近には兄に連れられてこの「べったらヤゴ」を採る目的でしばしば訪れていました。

ここで採れた「べったらヤゴ」は羽化の仕方が「シオカラトンボ」などとは異なる直立型の羽化方式でほとんど平らな場所でも羽化が出来る「サナエトンボ科」の「ヤゴ」でした。この当時青森平野の水田地帯に生息していた「サナエトンボ」という事になればその生息環境から推定して「ホンサナエ」であったと推定されます。しかし、「ホンサナエ」は津軽平野には普通でしたが 1965 年以降現在まで、青森県では再記録されていないということです。



ニホンザリガニ

この付近の水田用水路では秋水田の水を落として干上がった水路では「ドジョウ掘り」が出来ました。普通は網で掬うのですが、干上がった水路ではスコップで水路の底を掘れば面白いように泥の中に潜っていた「ドジョウ」が掘り出されるのでした。「ドジョウ」は昔から柳川鍋として食用にされていて「フナ」の様な臭みは無く美味でした。

「フナ」も我が家では素焼きにしたものを弁慶(藁を束ねて串焼きにした肴を串のまま刺して保存する藁細工)に刺して保存していて、ある程度溜まった時点でホタテの貝殻でじっくり骨が柔らかくなるまで味噌仕立てで煮込んだ「フナ味噌」にして食べていました。

小学校の6年生位の時、初めてフナを釣った事がありました、たまたま長兄(故人)のお供で北片岡付近の人為的な沼(線路の土手を構築するために掘った跡らしい)でしたが、兄が他の人たちの釣果を覗きに行つて竿の場所を離れていた時です。

この時、フナ特有の引きがはじまり、大声で兄を呼んだのですが、次の瞬間、ウキはスーッと走り出していました。兄の「上げろ!」の声で竿を持ち上げるとかなり大きな手ごたえがあつて20cm位のフナが釣れたのでした。

すぐ上の兄には虫捕り、長兄には魚釣りのお供として連れて行ってもらっていました。時には夕暮れ近い川面でマコモやアシが揺れたかと思うと一気にウキが引き込まれ、大ナマズに胃袋まで釣り針を飲み込まれたこともありました。

小川のほとりでは「サクラ蚊」と呼んでいた小さな「ヌカカ?」の1種が裸足で下駄履き程度の子供らの足には無数に襲ってきました。襲われてぽつんと血が滲み出た場所には付近一帯に生えている「ちどめぐさ=オオチドメ?」の葉っぱを貼り付けてジーツとウキを見つめているのでした。

付近の草原で鳴く「ぎーぎーギス=ヒメクサキリ」や「みつかどコオロギ=タンボオカメコオロギ」の鳴き声を聴きながら。



ククルマバッタモドキ♀



タンボオカメコオロギ

(次号に続く)